



【箴言】

- 課題を正しく問えば、正しい答えは得られる。解けない問題は、解ける問題に分解して解き、合わせて解とする。
- (The right answer is found if you ask correctly. The unsolvable problem is divided into solvable problems and the sum is taken as the total solution.)

原子力問題は正しく問題化されているか

何が論点か – 正しい問題の立て方：

多くの人は、原子力は人類に究極的な恩恵をもたらす、ということを知っている。その反面、事故を起こせば取り返しがつかない悲惨な状況を生み出す、ということも知っている。

現状はと言えば、反原発が報道の基調になっており、原子力推進に対する政府の姿勢は腰が引けており（エネルギー基本計画）、一方で原子力推進は、福島事故後8年も経過しているのにヒット一本も打てずにいる。よく潰されずにしぶとく生来ているものだとため息をつきたくなる事態である。原発が潰れるとどうなるのか、誰も言わない。政府方針に反対一辺倒の野党は、対案は出せずにいつも空騒ぎに終わる。対案を出せない政党が政権を取るとどうなるか、先の民主党政権の地獄を見れば説明は不要である。

ここで、「自然界には矛盾は存在しない。矛盾は言葉によって作りだされる」という文言を思い出す。言葉を使うのは人間だから人間が矛盾を作り出す。また、矛と盾を文字通り解釈すればそれは解けない。これは、**問題が解ける・解けないは問題の立て方に依る**、ことを示唆する。

メディアの報道の基調は、原発事故は怖い、放射能も怖い、だからゼロ原発だ！という印象操作に徹する。原発は事故を起こしたけれど、原子力なくして日本の将来はない、という側面から逃げるだけである。正しい問題の立て方を試みて解決を図るといって本道から目をそらしている。左派系メディアの本音は「問題は解決されないで混乱のままでいるのが望ましい」ということではないか。問題が解決されないと困るのは日本国民であって、メディアは記事が書ければよいだけではないか。

メディアは、原子力利用の根幹は、国民が受ける恩恵と事故のリスクとのバランスで決めるというIAEAの安全原則第4条に触れたがらない。

原子力の活用か放棄かは**問題の立て方**に依存する。死者ゼロ、放射線で健康障害を受けた人もゼロの福島事故を過剰に報道する姿勢はその場限りの虚構である。事故の恐怖だけで原発の

賛否を判断するのは国の将来を誤る。何故、こういうことになるのか。

「問題化」という問題：

この表現は山本七平氏の「常識の研究」に出ている。難しい言い方であるが、問題の立て方を違えると問題をこじらせるといっており、成田闘争問題が例示されている。

この問題は、新しい国際空港を建設する政府の計画（①）と用地の確保に農民が反対するのを過激派が利用するというねらい（②）が正面衝突した事件である。①と②は本質的に関係ないのだが、過激派の仕掛けが問題を複雑にしたためメディアはそこに目をつけ、両者を一体化して問題解決を図ろうというトーンで報道した。①の解決は②の解決とはならず、②の解決は①の解決にならないようにお互い独立なので、急所を突けなかったメディアが事件を大きくした。新国際空港建設問題は独立した問題で過激派の関与は問題をこじらせるだけだと報道していれば、大事件にはならなかった。過激派の関与は国民の利益に反する、という正義を述べれば良かったのだ。メディアは問題を事件として報道するだけで、自己に都合の良いように報道し、解決の提案は皆無である。このような見方は今の原発問題にも当てはまる。

解けない問題を解ける問題に分割する発想：

成田闘争問題を①と②の問題に分けて解くという方策は、解けない問題（成田闘争問題）は解ける問題（①と②）に分割してその和をもって全体の解とするというものである。①と②の単独問題は複合問題より簡単である。その和を複合問題の第一次近似解とする。それを基にして最終解を工夫する。日本人がこういう発想を採らないのは、理屈をこねるのを好まないことによるのかも知れない。

何故、日本のメディアはこのような当然のことが考えられないのか。彼らは情緒を基調にすれば安易に読者に受け入れられることを知っている。テレビの災害報道はいつも被災者の涙を伴う。解決や対策に目端を利かそうとしない。読者への迎合が基準である。複雑な原発問題を適切な“問題化”に落とし込み、解決策を示せば画期的な記事になるのに残念である。

山本七平氏は、1980年代に、過激派は成田闘争問題が終われば、原子力に刃を向けると予見している。福島事故を契機にした社会現象が本質的には“成田闘争問題”と同根なのでそれは的中して当然である。

原子力問題の“問題化”は正しかったのか：

原発問題は、成田問題よりはるかに複雑で、日本のエネルギー安全保障が関係しており、資源小国の日本にとって死命を制するぐらい重要である。

ではその主たる構成要因は何か。それは、原子力施設の**安全問題**と**反原発を掲げる勢力**（左派系メディア、その影響を受ける地方紙、原子力を政治利用したい野党群、メディアの虜にな

っている一般市民、など)、の二つである。これは成田問題に似ている。政府の関与として、原子力規制委員会と政府（内閣とエネ庁）と国会（原子力問題調査特別委員会）がある。

福島事故後に起きた原発問題は、左派系メディアによって次のように「問題化」された。

- 1) 原発怖し、放射線は恐ろしい、という恐怖論で一般市民を洗脳
- 2) 原発事故以上に悲惨なものはないという虚報の繰り返し（エネルギー争奪戦で戦争になればどれだけの命が失われるか）
- 3) 原発不要を言えば代替策を言わずにおれない。それを再生可能エネルギーに求める、という幻想
- 4) 敵を打ち負かすために、敵の中に矛盾をでっち上げるという戦術をとり、電力の金権体質、原発マネーを悪玉論として糾弾。

これは視野狭窄的な見方であり、原発潰しの「問題化」である。この問題化がまやかしと考えられる理由は、以下の通り。

- イ) この国から原発が消滅した後、石油が輸入できず、再生可能エネルギーは基幹電源にならない、状況下に対して対策を示さない
- ロ) 世界が原発を強力に推進している事実は報道されず、原発大国を目指す中国が日本を弱小国家に陥れるリスクなど、全く報道しない
- ハ) IAEA の安全原則第 4 条にあるように、原発活用の判断基準などの正論には目もくれない
- ニ) 風評被害に悩まされる国は日本を置いて他にないという事実の隠匿、等である。

1)、2)、3)、4) とイ)、ロ)、ハ)、ニ) を比べてみると、問題の立て方が際立って異なっていることに気づく。どうして賢い日本国民がこのような単純な片寄った報道に翻弄されるのだろうか。

おわりに：

原子力は、福島事故後、問題の在り方を情緒に委ねてあいまいにしてきたため、問題を解くことができず、衰退モードから脱却できないでいる。その原因がどこにあるのか、本稿では異なった視点から一つの分析例を示した。

原子力問題は国民に内在する原爆アレルギーという運命を今でも克服できていない。原爆を持つ北朝鮮、国際環境の激変に対応できなければ、我が国の独立と繁栄は砂上の楼閣であろう。原子力技術をしっかり持っていなければ、我が国の将来は想像以上に危ういものであろう。日本国民がメディアの虜から解放されることを願って筆を折りたい。（K.M.）